名古屋学院大学論集　社会科学篇　第60巻　第1・2号　pp. 21–38

〔論文〕

公共空間から街を再生する

北　原　理　雄

千葉大学（名誉教授）

要　　旨

近年，街路や広場などの公共空間を活用して街の活性化をはかろうとする事例が増えている。しかし，成功例は必ずしも多くない。本稿では，わが国における公共空間利用の歴史的事例を整理したうえで，筆者らが名古屋市と千葉市で行ってきた実験的取り組みを報告し，公共空間から街を再生するうえで重要なポイントを明らかにした。

キーワード：公共空間，オープンカフェ，パラソルギャラリー，仮設性，市民主体

Revitalizing cities from public spaces

Toshio KITAHARA

Professor Emeritus
Chiba University

発行日　2023年10月31日

1　はじめに

40数年前，日本建築学会東海支部の都市計画委員会で，東京大学の大谷幸夫教授を招いて建築と都市の関わりについて講演をしてもらう企画があった。しかし，先生が体調を崩されたため，筆者が急遽代役を務めることになった。そこで何を話したのか，ほとんど覚えていないのだが，若い司会者がコテコテの大阪弁で場を仕切ってくれたことが深く印象に残っている。それが井澤知旦さんとの出会いだった。

その後，彼が街の活性化，とりわけ公共空間の有効活用を通じた活性化に強い意欲を持っていることを知り，意気投合して研究や活動の場をともにすることが多くなった。『よみがえるダウンタウン』[1]の翻訳（8人の共訳），同書に取り上げられた米国都市の視察，欧米都市における公共空間利用の視察調査[2]などがその例である。いずれも懐かしい思い出だが，特に欧米6都市への二人旅は「弥次喜多珍道中」を地で行くような忘れがたい体験であった。

さて，筆者に与えられた役目は，公共空間の有効活用を通じた街の活性化を実践事例に基づいて論じることである。街路や広場などの公共空間は，都市に暮らす人びとの屋外活動を支える最も重要な空間のひとつである。

ヤン•ゲールは，屋外活動を必要活動，任意活動，社会活動の3つのタイプに分類している[3]。必要活動は，学校や仕事に行く，買い物をする，バスや人を待つ，使い走りをするなど，必要に迫られてする活動であり，物理的環境の影響をあまり受けずに発生する。任意活動は，散歩をする，賑わいを楽しむために立ち止まる，腰かけて日光浴をするなど，その気があり，時間と場所が許すときに行う活動であり，屋外環境の物理的条件に大きく左右される。社会活動は，子供たちの遊び，挨拶と会話，各種のコミュニティ活動など，人びとの存在を前提にして発生する交流活動である。魅力的な街には，必要活動だけでなく，任意活動や社会活動を支える場が必要である。言葉を換えれば，人びとが時を過ごし交流することのできる場が必要である。

しかし，屋外環境の物理的条件を整えれば，任意活動や社会活動が発達するわけではない。わが国では，道路法，道路交通法などによって，長いあいだ街路がもっぱら交通のための空間として位置づけられてきた。そのため，物理的条件が整えられても，社会的条件によって滞留や交流が妨げられていた。その障壁を取り除くことが，公共空間活用の課題であった。

本稿では，当時もっぱら交通空間として位置づけられていた街路を，交流空間として活用するために筆者らが行った実験的取り組みを紹介しながら，公共空間活用の今後の課題を考えてみたい。

1）Bernard J. Frieden, Lynne B. Sagalyn, 1989, *Downtown, Inc.: How America Rebuilds Cities*, The MIT Press, Cambridge, Mass.（北原理雄監訳 1992,『よみがえるダウンタウン―アメリカ大都市再生の歩み―』，鹿島出版会）

2）（株）都市研究所スペーシア 1998,『欧米のオープンカフェを支える制度的背景―公共空間の有効活用によるにぎわいの創出と都心活性化にむけて―』，名古屋世界都市景観会議 '97実行委員会

3）J. ゲール著，北原理雄訳 2011,『建物のあいだのアクティビティ』，鹿島出版会，pp. 14–21

2　賑わいの場としての公共空間

2-1　江戸の盛り場

現在，公共空間活用の面では欧米に一日の長がある。街路や広場で人びとにくつろぎと交流の場を提供しているオープンカフェ[4]がその代表例である。しかし，歴史を振り返ると，わが国でも各地で公共空間が人びとに時を過ごし交流することのできる場を提供していた。

まず，江戸に目を向けよう。『江戸名所図会』という書物がある。日本橋から出発し，南は金沢（神奈川），西は武蔵野，北は大宮（埼玉），東は船橋（千葉）へと足を伸ばす一種の名所案内であり，神田雉子町の名主　齋藤月岑の編で1～3巻が1834年（天保5年），4～7巻が1836年（天保7年）に刊行された。その巻之一に「両国橋」が紹介されている。

> この地の納涼は，五月二十八日に始まり，八月二十八日に終はる。つねに賑はしといへども，なかんづく夏月の間は，もっとも盛んなり。陸には観場所せきばかりにして，その招碑の幟は，風に飄りて扁翻たり。両岸の飛楼高閣は大江に臨み，茶亭の床几は水辺に立て連ね，灯の光は玲瓏として流れに映ず。楼船扁舟，所せくもやひつれ，一時に水面を覆ひかくして，あたかも陸地に異ならず。絃歌鼓吹は耳に満ちて囂しく，実に大江戸の盛事なり。[5]（原文ママ）

「陸には観場所せきばかり」とあるのは，両国橋の袂「両国広小路」の描写であり，絵師 長谷川雪旦の挿絵がその賑わいを活写している（図1）。西岸の岸辺に茶屋が並び，その手前に「芝居」「土弓」などの文字が見える。土弓は楊柳製の小弓であり，ここはその弓で遊ぶ射的場である。茶屋や土弓場

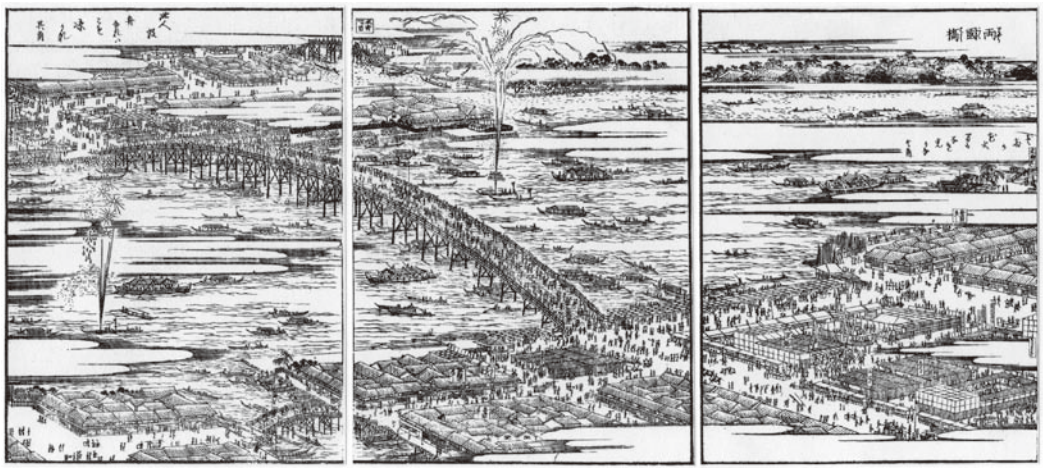

図1　江戸名所図会 両国広小路

4）open cafeは和製英語である。英語ではsidewalk cafe, street cafe, outdoor cafeなどと呼ばれている

5）市古夏生・鈴木健一校訂 1996，『新訂 江戸名所図会Ⅰ』，ちくま学芸文庫，pp. 126-127

は葭簀掛けだが，それより規模の大きな芝居小屋は，丸太と荒縄で骨組みをつくり，ムシロで覆った構造物であり，図中にも少し大きな桝目の壁面が見え，幟が翻っている。そぞろ歩き，屋台や小屋をのぞき，吸い込まれていく人びとが描かれ，彼らのさざめきが聞こえてくるようである。

広小路とは，防火・防災の目的で設けられた空地（火除地）である。明暦大火（1657年）の際，川や堀の手前で多くの死者が出たため，隅田川に大橋（両国橋）を架け，その袂に火除地を設けた。両国広小路の他にも，日本橋川の江戸橋広小路，寛永寺下の上野広小路など，盛り場として名高い広小路が少なくない。火除地である広小路は，本来建築のできない空地だが，町人が橋番・水防などの管理を請け負う代償として，助成地と呼ばれる区域の利用権を与えられたという[6]。ここに茶屋や芝居小屋など，仮設建造物が設置されたわけである。1842年（天保13年）の図面では，両国橋西詰の広小路内に3か所の助成地があり，助成地のあいだに幅約8～18m（4間半～10間）の往来が確保されている。

両国広小路における公共空間の利用からは，興味深い2つの点を読み取ることができる。第1は，簡単に撤去可能な仮設建造物によって，火除地に求められる空地性と賑わいを生む盛り場性を効果的に両立させている点である。そして第2は，橋や船着き場・護岸を含む公共空間の維持管理を町人が請け負い，一種のエリアマネジメントを成り立たせていた点である。

2-2　名古屋の盛り場

かつて名古屋随一の盛り場といえば「広小路」であった。

城下町建設当初，ここは中心部の町人地「碁盤割」の南端，堀切筋と呼ばれる通りだったが，城下の半分を焼き尽くした万治の大火（1660年）後，東半分の久屋町～長者町間が道幅約6m（3間）から約27m（15間）の防火帯に拡幅され，広小路と呼ばれるようになった。東西約650mの細長い空間である。そこが，江戸の広小路と同様の盛り場になった。

『尾張名所図会』という書物がある。尾張藩士 岡田啓と西枇杷島の蔬菜問屋 野口道直の共撰で，前編7巻が1844年（天保15年）に刊行された（後編6巻の出版は明治時代）。その巻之一に「広小路」が紹介されている。

> むかしは那古野の町はずれにして，これより南の方は田野なりし故，今も開帳札など多くここに建つるはその余波なり。東に庚申堂，西に柳薬師などありて，はなし・物まね・諸見せ物・居合抜の歯みがき売など，常にむれ居て往来人の足をとどむ。取りわき夏月納涼の頃は，貴賤袖をつらねて群集し，辻売の夜店・茶店の燈火赫奕として，遊興に夜の更くるを知らず，実に夜陰の壮観なり。[7]（原文ママ）

噺，物まね，見せ物，居合抜きなど，さまざまな興行が行われ，人びとを引きつけていた様子が述

6）吉田伸之 2005,「両国橋と広小路」,『江戸の広場』，東京大学出版会，pp. 3-23

7）林英夫編 1984,『日本名所風俗図会 6 東海の巻』，角川書店，p. 30

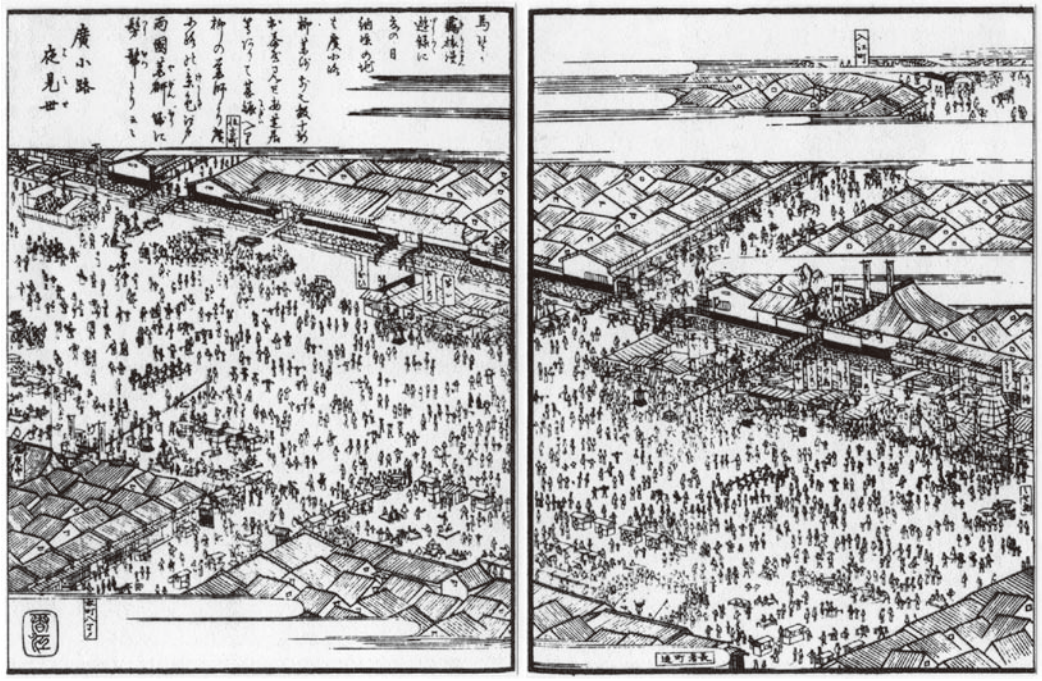

図2　尾張名所図会 広小路夜見世

べられている。図2は，絵師 小田切春江による「広小路夜見世」の景である。描かれているのは広小路の西端で，右下が長者町通，広小路を横切って左下から右上に伸びているのが，城と熱田を結ぶ本町通である。右端近くの幟の立った境内は柳薬師であり，その門前に茶屋，楊弓，見せ物など，葭簀掛けの小屋が並び，そぞろ歩く人びとが広場のような空間を埋めている。また，画面左上には次のような書き入れがある。

> 馬琴が『覊旅漫遊録』に，夏の日納涼の地は広小路柳薬師前なり。数十軒出茶屋・見せ物・芝居等ありて，甚だ賑へり。柳の薬師より広小路の景色，江戸両国薬研堀に髣髴たり云々（原文ママ）

夏の宵，灯火に誘われて繰り出してきた群衆の賑わいが「江戸両国薬研堀」を思わせるという記述も，あながち誇張とはいえない。

時は移り，1886年（明治19年）に鉄道が開通し，現在の名古屋駅より約200ｍ南，笹島の沼沢地に名古屋停車場が開設される。これに伴い，堀切筋の長者町〜堀川間が約23ｍ（13間）に拡幅され，堀川〜笹島間に幅約18m（10間）の道路が新設された。都心と鉄道駅を結ぶ幹線街路，広小路通の誕生である。

1898年（明治31年），名古屋停車場〜栄町間にわが国で2番目の市街電車が開通すると，広小路通の沿道には商店が軒をつらね，やがて洋風建築の百貨店や銀行が威容を誇るようになった。大正時代

には「広ブラ」という言葉も生まれ，最盛期には400以上の屋台が歩道に並び，酔客や家族連れで夜が更けるまで賑わったという[8)]。屋台の灯が消えたのは1973年（昭和48年），歩道を削って車道を拡幅するためであった。筆者が名古屋に赴任した1970年代後半には，広小路の屋台を懐かしむ年配者の声をよく耳にしたものである。

2-3　賑わいの場の特質

江戸でも名古屋でも，公共空間を利用した賑わいの場の顕著な特質は，その仮設性であった。葭簀掛けやムシロ掛けの小屋は，火除地の機能を保持しながら，人びとに時を過ごし交流することのできる場を提供した。その仮設性は，現代の公共空間利用に多くの示唆を与えてくれる。

もっとも，公共空間利用の仮設性はわが国だけのものではない。本章冒頭で触れたように，欧米諸都市では，街路や広場に並ぶカフェのテーブルと椅子，定期市の屋台など，街を彩る仮設的要素がごく日常的な存在になっている。いや，欧米に限らず世界各地で仮設的要素による公共空間利用を目にすることができる。

ところが，わが国では少なくとも20年ほど前まで，こうした公共空間利用が原則的に認められていなかった。硬直的な規制主義，交通至上主義，近視眼的な単一機能主義など，理由はいくつも考えられる。しかし，1990年代に潮目が変わりはじめていた。以下に紹介する筆者らの実験的取り組みは，壁を破ろうとした新しい流れの一端である。

3　賑わいの景観デザイン

3-1　ハードだけで街は活きない

バブルと呼ばれた1980年代は，大規模な都市開発が盛んに行われた時代であり，民間だけでなく公共による開発も活発に行われた。そこでは，地上げに代表される負の側面だけでなく，生活の質や空間の質に対する配慮が育っていた。

名古屋では1984年に都市景観条例，1987年に都市景観基本計画がつくられ，開発の質を重視する気運が高まっていた。広小路通では1991～94年に歩道整備が行われ，歩道幅が広がり，舗装とストリートファニチュアが一新された。図3は1981年に撮影した朝日新聞名古屋本社（左手の黒い建物）前の広小路通である。人びとが狭い歩道に押し込められ，街路樹の根方に段ボール箱が乱雑に放置されている。図4は同じ場所を同じ方向から撮った1996年の写真で，ゆったりした歩道に質の高い舗装がほどこされ，街灯やボラードも入念にデザインされている。民地側でも再開発が行われ，建物前に公開空地(左手の舗装が切り替わった部分)が設けられた。明らかに公共空間の質は向上している。

しかし，閑散としている。これだけのスペースがあれば，テーブルと椅子，パラソルを並べ，人びとがくつろぎ交流するオープンカフェを開いても，歩行者の通行を妨げることはない。ところが，当

8）　この項の広小路に関する記述は次の書に拠るところが多い
大野一英 1976,『広小路物語』，六法出版社

図3　名古屋 広小路通（1981年）

図4　名古屋 広小路通（1996年）

時は道路法・道路交通法で歩道上のカフェは認められていなかった。民間が所有する公開空地も，容積率ボーナスと引き換えに設置されたスペースなので，営利行為をすることは認められていなかった。ハードの質を高めるだけで街が生き生きするわけではない。質の高い公共空間を有効に使いこなしてこそ，街が活きてくるはずである。

そこから挑戦が始まった。

3-2　オープンカフェと屋台

広くなった歩道を歩行者の流れをさばくだけの通路にしておいてよいのだろうか。ましてや，自転車が所狭しと不法駐輪し，その隙間を人びとがすり抜けなければならないような状態にしておいてよいのだろうか。せっかくゆとりのある質の高い歩道ができたのだから，街に生気を吹き込む賑わいの舞台として活用できないだろうか。賑わいとは，ただ人が多くいるだけの状態ではない。それだけでは雑踏・混雑に過ぎない。人びとが気持ちよく時を過ごし交流することができて，初めて賑わいになる。歩道の活用が生みだす魅力を市民に実感してもらいたい。市民の理解が，硬直した制度を変える力になるにちがいない。

折しも1997年，名古屋市都市景観基本計画策定10周年を機に名古屋世界都市景観会議が開かれ，筆者は「賑わいの景観デザイン」というセッションを担当することになった。そこで，このテーマを会議場のなかだけで十分に議論するのは無理だと説明して，8月に実験を行う機会を持つことができた[9)]。いまでいう社会実験だが，国土交通省（当時は建設省）が道路利用の緩和施策にこの用語を使いはじめるのは1999年のことであり，それより2年早い挑戦であった。

実験の場所はテレビ塔に近い久屋大通。当初は歩道での実施を希望したが，許可を得ることができず，隣接した市有地を使うことになった。演し物はオープンカフェと縁日（図5）。

「コペンハーゲンプラザ」と名づけられたオープンカフェを制作したのは，デンマーク王立芸術大

9）名古屋世界都市景観会議'97 実行委員会編 1998，『名古屋世界都市景観会議 '97 ―都市風景の生成―』，名古屋世界都市景観会議'97実行委員会，pp. 54–63

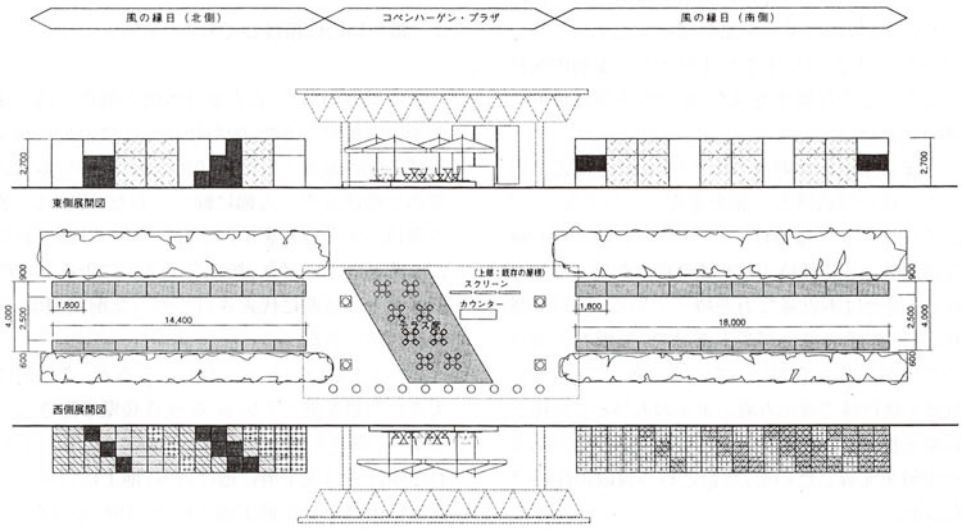

図5　名古屋 コペンハーゲンプラザ／風の縁日

学のヤン・ゲール教授（当時）と学生のチームである。間口12ｍ，奥行き7ｍのスペースに，学生が角材と合板でウッドテラスを組み，ダークグリーンと白のペイントでコペンハーゲン都心部の地図を描いた。そこに4本のパラソルを配し，32席のテーブルと椅子を置いて，これも学生手づくりのカウンターからデンマークビール（カールスバーグ）と清涼飲料を販売した。保健所の指導で，飲み物は缶のまま渡し，客が自分でカップに注ぐというやや味気ないシステムであった。8月末の暑い名古屋で，はたして人が地下街から出てきてくれるだろうか。そんな心配をよそに，物珍しさも手伝ってか，実験が行われた4日間（28～31日），朝から晩までカフェは大盛況であった。

図6はカフェ側から歩道を写したもので，左端に立っているのがゲールさん，3人目のしゃがんでいる人物は井澤さんである。パラソルはもちろんカールスバーグの提供。手前の後ろ姿2人はボランティアのギター演奏，夜のカフェ（図7）でもボランティアの独唱会が開かれた。いずれも井澤さんのネットワークの賜であった。

図6　名古屋 コペンハーゲンプラザ

図7　名古屋 コペンハーゲンプラザ

図8　名古屋 風の縁日

図9　名古屋 風の縁日

ヤン・ゲールは，名古屋には立派な街路があり，たくさんの人がいるが，彼らはただ移動しているだけで，そこには「生活」がないと指摘している。オープンカフェは街角の小さなオアシス，そこに腰かけて一服すると街の輝きが違ってくる。

筆者ら千葉大学と名古屋市立大学のチームは，コペンハーゲンプラザの南北，長さ40m，幅4mの細長いスペースを使って，伝統的屋台の現代版「風の縁日」を制作した。ヨーロッパを代表する賑わいの場所づくりがオープンカフェなら，日本は縁日というわけである。屋台は不思議な力を持っている。祭りの日，仮設の屋台が並ぶだけで，見慣れた通りや空地がハレの空間に変身する。建設工事の足場に使う鉄パイプで屋台を組んで幅2.5mの回廊をつくり，暑い季節なので風を視覚化・聴覚化して涼を演出しようと，そこに風鈴を250，風車を450並べて吊るした。また，CDをスダレ状に架け，色ガラス入りのタンブラーを飾った。そして，名古屋周辺には焼き物の産地が多いので，若手の陶芸作家に展示即売の店を出してもらった。これも予想以上に人を呼び，美濃焼の「MINO器村」では4日間で170点の作品が売れたという。

図8は北側からの眺めであり，左手が焼き物の屋台店，右手が風鈴の棚である。図9は南側からの夜景で，左手に風車の壁，右手は鉄パイプの骨組みを白い布パネルで覆い，白熱電球を入れた大行灯である。

オープンカフェや屋台のような仮設の要素は，賑わいの場を生成する一種のインキュベータ機能を持っている。賑わいが定着してきたら，状況に応じて常設化することもできる。日本の従来の公共空間整備は，ハードを整えることに偏りがちで，それを使いこなすことが不得手だった。「賑わいの景観デザイン」の実験テーマは，公共空間を人びとが時を過ごし交流する場所にするソフトなデザインを考えることであった。

3-3　人間の街を取り戻す

なぜデンマークなのかと，よく尋ねられた。パリやイタリアなら分かるが，オープンカフェの実験をするのに，なぜ北欧からゲストを呼んだのか。「40年前，コペンハーゲンには一軒のオープンカフェもなかったからだ。」筆者はそう答えた。

コペンハーゲン市は，1962年，都心部を縦断する目抜き通りのストロイエを歩行者専用街路に改

図10　コペンハーゲン ストロイエのオープンカフェ

造した。それは世界に先駆けた試みであったが，車社会が急速に拡大しつつある時期だったため，時代に逆行するという批判が少なくなかった。また，デンマークの気候は3か月の夏に9か月の冬といわれるほどきびしいため，風土にそぐわないという反対意見も根強かった。「歩行者街路はスカンジナビアでは役に立たないだろう」「自動車が入れないということは客が来ないということ，客が来ないということは商売が成り立たないということだ」「私たちはスカンジナビア人であり，イタリア人ではない」「スカンジナビアに屋外で公共生活を楽しむ伝統は存在しない」。しかし，実験的に行われたストロイエの歩行者街路化は大成功を収めた[10)]。

ストロイエは，夏季には1日6万人近い人で賑わう。1962年に15,800㎡だった歩行者空間が1992年には82,820㎡に成長していた。ストロイエとそこから枝分かれする歩行者空間には，多くのカフェやレストランが路上に店を出している（図10）。1960年代初め，屋外で飲食を楽しむ場所を実質的にひとつも持っていなかった市民が，1995年には126か所，5,000席のオープンカフェを繁盛させるまでになった。これがデンマークからゲストを招いた理由であった。屋外で時を過ごし交流する伝統を持っていなかった人びとが，それを享受する新しい伝統を育てている。ましてや，公共空間の利用を楽しむ伝統を持っていた私たちに，それができないはずはない。

10）J. Gehl & L. Gemzøe 1996, *Public Spaces Public Life*, The Danish Architectural Press, Copenhagen, Denmark, pp. 52–59

図11　コペンハーゲン ストロイエにおける滞留活動（1968年）

ヤン・ゲールがストロイエの歩行者街路化に直接関わったわけではない。1960年に王立芸術大学を卒業した彼は，この時期，設計事務所で働く若手建築家であった。彼がコペンハーゲンの街と深く関わるようになるのは，1966年に研究員として母校に招かれてからである。彼は学生たちと街に出て，公共空間の使われ方を調べはじめた。一日を通じて，また四季を通じて，歩行者の活動と出来事を克明に記録したのである[11)]。図11はそうした記録の一部，1968年7月23日（火）の昼，ストロイエの中心部に立ち止まり，あるいは座っている人をすべてプロットしたものである。彼は，観察結果に基づいて，人びとを引きつけるのは人間の活動だと喝破している。大道芸人や日曜画家のまわりには人垣ができるが，銀行やオフィスの前に立ち止まる人はほとんどいない[12)]。彼は，1968年の調査につづいて1986年，1995年，2005年と同様の調査を実施した。経年的追跡調査の成果は，人びとが公共空間でどのように振る舞い，何を望んでいるか明らかにし，市や国の政策決定に説得力のある根拠を提供した。

コペンハーゲンの取り組みは，歩行者主体の公共空間整備が街の活性化に大きな効果を発揮することを示し，ヤン・ゲールの研究がそれを後押しする力になった。

4　千葉市パラソルギャラリー

4-1　都市景観市民フェスタ[13)]

筆者は1960年，千葉市内の中学校に入学した。当時の千葉市は人口24万の地方都市だったが，国鉄駅と県庁を結ぶ目抜き通りには商店が軒をつらね，1日3万人以上の人で賑わっていた。その後，市は東京のベッドタウンとして急成長し，筆者が千葉大学に赴任した1990年には人口が83万（3.4倍）

11）A. マタン＋P. ニューマン著，北原理雄訳 2020，『人間の街をめざして―ヤン・ゲールの軌跡―』，鹿島出版会，pp. 10–25

12）J. ゲール著，北原理雄訳 2011，『建物のあいだのアクティビティ』，鹿島出版会，pp. 38–41

13）前年までシンポジウム形式で行っていた「都市景観市民フォーラム」の屋外アクションという位置づけで当初「フォーラム」の名称を使用したが，賑わいイベントであることを明示するため2002年から「都市景観市民フェスタ」に改めた

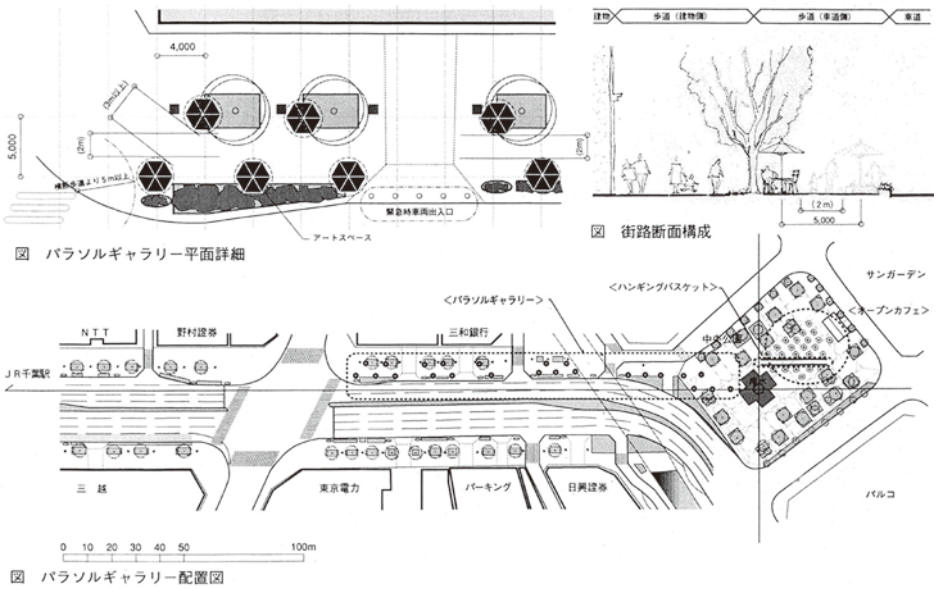

図12　千葉市 オープンカフェ／パラソルギャラリー配置図

に増加していた。しかし，目抜き通りは昔日の面影を失い，個人商店の廃業が相次いで空洞化が進みつつあった。

1990年代の千葉市は，街の魅力を再生する手立ての一環として都市景観整備に力を注ぎ，街路や公園の整備を進めた。戦災復興で旧都心につくられた約70m四方の中央公園が，石畳舗装の広場風スペースに再整備され，JR千葉駅[14]と中央公園を結ぶ駅前大通り（長さ約500ｍ，幅50m）も，歩道幅が10～15ｍに拡幅され，ケヤキ並木の舗装とストリートファニチュアが一新された。しかし，せっかくのハード整備が活かされず，朝夕の通勤時間帯以外は利用者の少ない閑散とした空間になっていた。

そこで，整備された街路と公園を有効に使いこなし，街に賑わいを呼び戻す実験を行おうということになり，2000年5月に中心市街地まちづくり協議会，商店街，千葉市，千葉大学が参加して実行委員会を発足させた。検討会議を重ねた結果，「にぎわい，ふれあい，いこいの場」をテーマに，11月にオープンカフェとパラソルギャラリーを主体とするイベントが実施された（図12）。

オープンカフェは中央公園を舞台とし，中央に市民が制作したフラワーバスケットを飾る「花の回廊」を置いて，その両側に23卓，95席の「ユニバーサルカフェ」を配した。花の回廊は，公園を横切る歩行者の通路を確保する役割も果たしていた。仮設のカフェでも味は本格派にしようと，地元のレストラン経営者に営業を任せ，大型テントに本格的厨房を構えた。厨房設備を備えたオープンカフェは初めての試みだったが，3日間の来客数が833人を数え，期待以上の賑わいを生みだした（図

14）　1963年，旧千葉駅から西約700ｍの現在地に移転

図13　千葉市 ユニバーサルカフェ（2000年）

図14　千葉市 パラソルギャラリー（2000年）

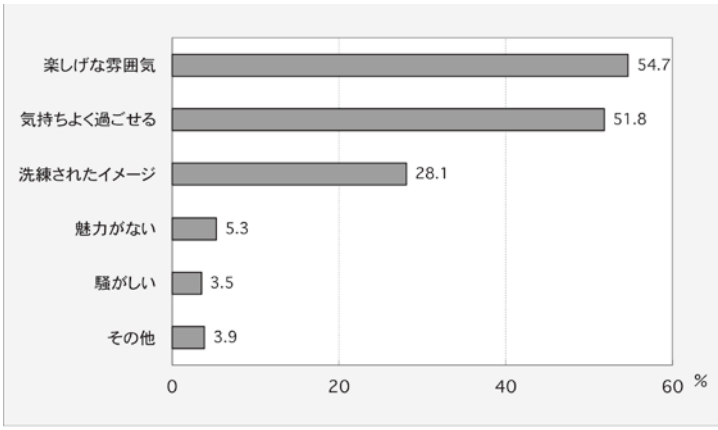

図15　千葉市 オープンカフェとパラソルギャラリーの印象

13)[15]。

パラソルギャラリーの舞台は駅前大通りの北側歩道である。最初はここでもカフェを開こうとしたが，当時は許可の見通しが立たなかったこともあり，歩道にパラソルを並べて市民の手づくり作品を展示し，街を交流型のアートスペースにする企画を打ちだした。中央公園寄りの歩道幅15mの区間150ｍが初年度の会場となった。この区間は歩道中央にケヤキと照明ポールが立っているので，建物側6ｍを歩行ゾーンとして歩行者交通のスペースを確保し，車道側に直径2mの白いパラソルを2列に並べ，2ｍの通路をとった。インスタレーション的な景観効果を生みだすとともに，パラソルの下を市民のアートスペースとして応募者に開放した。アマチュア美術団体からプロの工芸作家まで15組が集まり，多彩な作品展示が行われ，3日間で4,400人の来訪者が展示を楽しんでくれた。パラソルという柔らかい仮設要素が，歩道を出展者と来訪者の交流の場所に変え，市民が参加して街に賑わ

15）千葉市都市景観デザイン室・千葉大学都市計画研究室編 2001，『平成12年度都市景観市民フォーラム 報告書』，千葉市都市景観市民フォーラム実行委員会，pp. 23–36

いを取り戻す舞台を提供した（図14）[16]。

期間中に行われた市民アンケートでは，オープンカフェとパラソルギャラリーについて，722人の回答者の内395人（55％）が「まちが賑やかになり，楽しげな雰囲気がする」，374人（52％）が「開放的で屋外で気持ちよく過ごせそう」と評価していた（図15）[17]。3日間の限られた実験だったが，公共空間で時を過ごし交流することの楽しさを市民にアピールするうえでも一定の効果をあげ，次年度以降の継続に弾みをつけることができた。

4-2　市民がつくるパラソルギャラリーへ

その後，オープンカフェとパラソルギャラリーは毎年の恒例行事になった。カフェは2年目から中心市街地まちづくり協議会が運営の主体を担い，営業期間を2年目16日間，3年目37日間と延ばし，

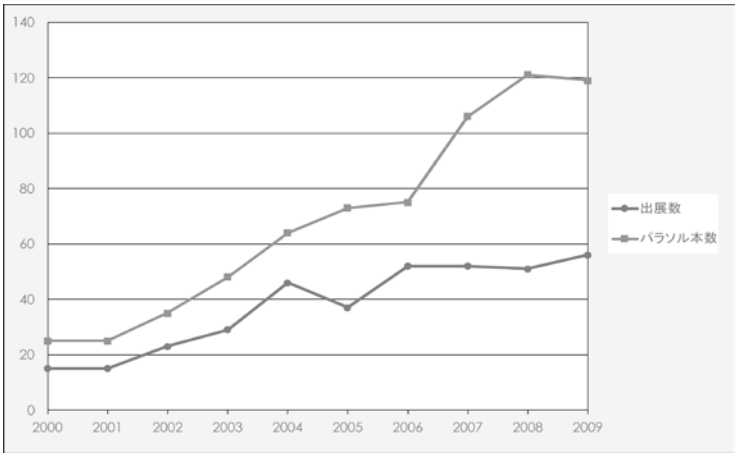

図16　千葉市 パラソルギャラリーの出展数とパラソル本数

図17　千葉市 パラソルギャラリー（2004年）

図18　千葉市 パラソルギャラリー（2006年）

16）同上書，pp. 47-60

17）同上書，pp. 67-68

4年目からは4月～10月の半年営業が定着した。

パラソルギャラリーは，3年目から出展希望者の増加に合わせてパラソル本数を増やし，2004年には千葉駅までの区間を64本のパラソルでつなぎ，46組の展示が街を彩った（図16）。この区間は歩道幅10mであり，車道寄りにケヤキ並木がある。そこで並木に沿ってパラソルを1列に並べ，その脇1mを滞留ゾーン，建物側4mを通行ゾーンに設定した（図17）。さらに2006年には開催時間を午後8時まで延長し，パラソルのなかに白熱電灯を入れて夜景の演出をはかった。白いパラソルに柔らかく映える光は幻想的で，期待以上の効果をあげることができた（図18）。

パラソルギャラリーによって，実際にどの程度のアクティビティが生まれているのだろうか。2005年の調査では，非開催時の週末は10分間の通行者数が62人，開催時は205人であり，3倍強のマグネット効果が確認された[18]。また，通行者が増えるだけでなく，出展者と来訪者の交流が頻繁に発生している。交流頻度が高いのは手芸品，陶芸作品，洋服などの展示で，特に製作実演をしている展示では5分を超える滞留が多く見られた。

パラソルギャラリーは大通りの北側歩道で開催されていたが，2007年に南側歩道でコンテナキッチンを使ったカフェが承認され，2008年には同じく南側のデパート前で20席のカフェが開設された。当初許可されなかった歩道上カフェが可能になったのは，2005年に国土交通省が道路空間の柔軟な活用を認めた「道路活用ガイドライン」を打ちだしたためである。場所を南側歩道にしたのは，北側は銀行や証券会社が軒をつらね，週末にシャッターが下りるのに対し，南側はデパートと家電量販店が並び，連携が可能だったことによる。デパート内にある喫茶店が協力してくれたことも大きい。歩道空間の活用を考えるとき，沿道建物の1階用途とファサードの開放性は重要な条件になる。図19は2009年のデパート前カフェである。

都市景観市民フェスタは千葉市の補助金を受けて実施されてきた。しかし，市の財政赤字の影響で2010年以降の補助金が打ち切られることになり，オープンカフェをはじめとするイベントの中止が

図19　千葉市 パラソルギャラリー（2009年）

図20　千葉市 パラソルギャラリー（2010年）

18）奥平純子他 2008,「仮設環境による公共空間のアクティビティ生成に関する研究―千葉市パラソルギャラリーにおけるにぎわい調査―」,『日本建築学会計画系論文集』Vol.73, No.623, pp. 161-167

決定された。パラソルギャラリーについては，関係者から強い継続要望の声が寄せられたため，出展経験者に緊急アンケートを行い，出展料（2009年までは出展無料）を負担しても参加したいという7割以上の回答を得た。そして，出展料と企業・団体の協賛金で経費をまかない，開催を継続することができた（図20）。市も引きつづき人的支援を行ってくれた。

パラソルギャラリーは，市民とつくり，市民と楽しむことをコンセプトにしていた。そのため，2006年に原則全員参加の「パラソル会議」を立ち上げ，出展者が作品を持ち寄って披露しあったり，街を演出する展示ルールを話しあったりする場を設けた（図21）。パラソルギャラリーの理念・準備状況，出展者の感想・意見，来場者アンケートの結果などを掲載する「パラソル新聞」も発行してき

図21　パラソル会議（2007年）

図22　パラソル運営会議（2011年）

図23　千葉市 パラソルギャラリー（2022年）

た。開催継続には，こうした情報・意識の共有が大きな力になったにちがいない。2011年からは実行委員会に市民出展者が参加し，企画段階から議論に加わるようになった（図22）。

2019年に20回を数えたパラソルギャラリーだが，2020年と2021年はコロナ禍のために開催中止を余儀なくされた。しかし，2022年はパラソル50本，出展44組と規模を縮小して再開し，1万人を超える来場者と交流を楽しむことができた（図23）。近年は千葉駅前大通り以外に，県立芸術文化ホールのある青葉の森公園や幕張新都心でも，市民委員が主体になってパラソル5～10本程度のミニパラソルギャラリーを年に数回開催している。「市民とつくる」から「市民がつくる」への展開である。

5　おわりに

本稿では，名古屋と千葉で行った実験を中心に，黎明期から現在にいたる公共空間活用の取り組みを追ってきた。最後に，その経験を踏まえて，公共空間から街を再生するうえで重視すべき3つのキーワードをあげておきたい。

①　**仮設性**：パラソル，テント，屋台など，ソフトで軽い仮設的要素は，公共空間の柔軟な活用を支える重要な役割を果たす。多くの場合，簡単かつ比較的安価に設置し，人びとが時を過ごし交流する場を効果的に生みだすことができる。そして，役目が終わったら簡単に撤去することができる。ハード整備への投資は，次の段階で状況に応じて行えばよい。仮設的要素は，街を活性化するインキュベータ機能を持っている。

②　**目の高さの街**：歩いているときは，まわりを眺める時間がたっぷりあるので，目の高さにある建物1階のディテールが特に重要である。ヤン・ゲールは，「目の高さの街」の重要性をこうに述べている[19]。公共空間に面した建物の1階ファサードが開放的だと，街と屋内のあいだに交流が生まれ，双方のアクティビティが充実する。公共空間の活用をはかる際には，隣接建物1階の用途と形態に入念な配慮が必要である。

③　**市民主体**：公共空間の活用をはかる際，誰もが思い浮かべるのはオープンカフェであろう。しかし，オープンカフェは商売であり，十分な客が入らなければ経営が成り立たない。一部の大都市を除いて，再生を必要としている街では，公共空間に市場原理を持ち込むのは難しい。パラソルギャラリーは営利を目的としていない。市民の趣味を活かし，街に仮設のギャラリーを開くことによって，公共空間を交流の場にする試みである。そこに賑わいが生まれれば，周辺商業地の価値を高めることにつながるだろう。市民が主体になって公共空間で交流を楽しむところから，街の再生が始まる。

図版出典

図1　市古夏生・鈴木健一校訂 1996，『新訂 江戸名所図会 I』，ちくま学芸文庫，pp. 130–132

19）J. ゲール著，北原理雄訳 2014，『人間の街―公共空間のデザイン―』，鹿島出版会，p. 137

図2　林英夫編 1984,『日本名所風俗図会 6 東海の巻』，角川書店，p. 29

図10　J. ゲール著，北原理雄訳 2011,『建物のあいだのアクティビティ』，鹿島出版会，p. 39

図12　千葉市都市景観デザイン室・千葉大学都市計画研究室編2001,『平成12年度都市景観市民フォーラム 報告書』，千葉市都市景観市民フォーラム実行委員会，p. 51

＊ 出展記載のない図版は筆者＋千葉大学都市計画研究室の撮影・作成